

保育者養成における協同学習による授業展開の試み

－グループワーク「音によるあそび」をテーマとして－

岩淵 摂子・上村 裕樹・金野 麻衣

(保育学科)

I. はじめに

2021年度の保育内容A（聖和学園短期大学において、それぞれ異なる専門領域をもつ複数の教員による協同に基づき、学生が子どもに関わる上で必要とされる知見について、複数の視座を総合的に学び、保育内容の総合化を図る授業であり、保育学科における中心的な授業として、学習の総まとめの時期である2年生後期に実施される演習講義）の授業では、「子どもの目線に立ち、子どもの疑問やなんでについて、一緒に考えてみよう」をテーマとして取り組んだ。子どもの疑問やなんでということについて、保育者の目線から子どもの興味と関心の広がりに向けて関わる保育者のあり方について、授業において課題を設定し、グループでの取り組みにより検討を行った。また、それらの様子について可視化できるよう、記録し、グループでの検討した遊びについて報告することとした。

子どもにとって疑問を持つことは、興味や関心の表れであり、主体的に物事に取り組むためのきっかけであると言える。興味をもって、驚きや楽しさを感じ、自ら関わろうとする姿は、子どもが主体的に環境に働きかける姿であり、環境にはたらきかけ遊ぶ姿は、子どもにとっての経験と体験の蓄積の機会であり、学びの獲得であるといえる。

遊びは子どもにとって生活する姿であり、興味や関心をもって環境と応答的に関わる機会である。遊びを通じて学ぶことへの情熱と

意欲を育てていくことが、保育においてとても大切な関わりであり、保育者が子ども一人ひとりの姿をしっかりと捉え、観察し、記録として蓄積していくことを通して、子どもの成長・発達を可視化し、共有することで、保育の振り返りへとつながり、保育の質の向上が図られる。

子どもの学びに伴う成長と変化、子どもの可能性について考えていくことを、子ども自身も含めた子どもを取り巻く全てのものと共に共有し、子どもが遊びを通じて何を学ぶのか、一人ひとりが試行錯誤しながら、自分自身で考え、体験し、学んでいく中で子どもの育ちと変化を保育者が大切にできる力を育むことを目標の一つとして授業における学びに取り組んできた。

子どもの実際の姿を具体的に捉える方法として、子どもの日々の体験について、環境と応答的に関わる子どもの姿を保育者が詳細かつ具体的に知り、主体的な学びを促していくことが、保育においては重要な一つのプロセスとされるものであり、実習での様子や初任保育者の取り組みの姿において、子どもの興味や関心を捉え、その内容に対して支援的に関わり、主体的な学びを促していくことが、本学科における学生の課題として示されている。この点に関して、学生自身も自身の学習の理解の不足や知識と技術の不足を理解しており、学ぶことの重要性は理解していることが、これまでの学習のコメントにおいて示さ

れてきた。特に、保育場面を想定し、子どもへの関わりにおいて、保育者として自らの業務として、子どもの興味や関心に基づいて、自発的に生まれるであろう疑問や質問に対して、保育者として、具体的に子どもに分かる形で説明することが難しい自然現象の事象に焦点をあてた。そして、そこから保育場面において、日常的に子どもが環境と応答的に関わる中で疑問を持ちやすい光や風、温度、紅葉などをテーマとして取り上げ、受講学生が、保育者として子どもの疑問に答えるために、系統教育的な学習としての事実の伝えではなく、どのような遊びや体験の機会を環境として構築し、子ども主体として、共に学び合うことができるか検討していくこととした。

そして、授業展開の方法として、ジョンソンら（1993）による、小集団を活用した教育方法であり、学習者が一緒に取り組むことによって、自分の学習と互いの学習を最大限に高めようとする「協同学習」の手法を取り入れることとした。

これは、単純にグループに分けて学習を経験するだけではなく、学習者の小集団内での互恵的な相互の依存関係を基に、協同的な学習活動を生起させる技法である。その専門性に共同性を有する職業である保育者を目指す受講学生にとって、対話的に自らの意見を含めた互いの意思を表出し相互の学び合いを通して、より深い思考を導き出し、全体への報告という形でアウトプットを図る学習手法は、これまでの保育内容Aにおける学習経験から有効的な手法であることが、学生評価からも認められているため、授業展開における核として取り入れた。

学習を通して、学生達は、「子どもはなんで？と気になる探究心があって、好奇心や思考力が伸びる時期であり、私たち保育士はそのなんで？に寄り添い、分かりやすいように

子どもの興味を持っているもので遊び、その好奇心や思考力を大事に育む必要があると保育内容を勉強してより感じることができた。」「自分がわかるだけでなく、友達と共有してわかりあうことだったり、疑問に思ったことを子どもたちに話した時にもわかりやすいような伝え方だったり、様々な学びを一つ一つの活動から見つけることができた」など、受講しての感想において示しており、実践的保育活動を想定し、学ぶことを目的とした学習において、協同学習の手法を用いることは、学習効果が高く、受講学生の学びの理解も得やすかったことが示された。

2022年度もこの協同学習の方法を踏襲することとし、2021年度授業で得られた知見を基に、継続的な取り組みとして、「見えないものを子どもに伝えよう」をテーマに、子どもの日常を大切にしながら、その中で子どもと保育者が得られる学びについて考えたいとの思いから、「音」を一つの題材として取り上げた。

本学では、1年次に「音を聴くこと」の意識を高める実践として音の意識化の導入を表現の授業において行っている（松村ら2022）。松村らは、「子どもがモノとの関わりの中で感じ取った音を保育者が共感的に受け止め、楽しみを共有することで、子どもの音や対象の特性に対する気づきが豊かになっていく。（中略）日常にありふれた音の聴き方が備わってくることは、保育者としての資質を高めることに繋がる」と述べている。

このような音を聴くことを意識化する試みは、マリー・シェーファーが1960年代末に「サウンドスケープ」を提起したことからその流れは始まった。音感受教育を提唱した吉永（2016）は、サウンドスケープについて「音（音楽）に対してだけではなく、周囲の人や環境に対して心を開いてかかわろうとする積極的

な姿勢を含むもの」と述べている。この「周囲の人や環境に対して心を開いてかかわろうとする積極的な姿勢」は、保育を通して子どもにぜひ育みたいものとする。保育者養成において、子どもを主体として、保育の中で子ども自身が身近にある多様な音に気付き、それらを楽しみながら、もっと色々な音を聴きたい、鳴らしたいという意欲を高めたり、音の鳴る仕組みへの興味が芽生えるようなあそびを考案する経験は、5領域の総合化に結び付き、保育者としての資質・能力を高めることに繋がると考えた。そのため、グループワークを行う保育内容 A の授業で、「音によるあそび」を最初の1つ目のテーマとして取り上げた。保育では年齢や子どもの発達を考慮して保育計画を作成することが必須であるため、どのグループの対象も4歳児と設定した。

本研究では、このグループワークで学生が何を、どのように学んだかを明らかにし、今後の授業改善につなげたい。

受講者は、1年次前期に音の意識化の導入を行っており、2年次前期に教育実習と保育実習を経験している（注1）。本研究では、

グループワーク I の各グループの取り組みの報告・発表を行いその成果を共有した後に実施した振り返りフォームの分析を行い、協同学習に学生がどのように取り組んだか、学生たちが考案した活動はどんな内容で、それらを学生たち自身はどのように評価するのか、またその評価の理由を検証することが、彼らが何をどのように学んだかを明らかにすることにつながると考えた。そして、グループワーク I の活動・発表を通して何を学んだかについての自由記述を分析した上で、次年度の授業へつなげることを目的とした。

II. 研究方法

1. 実施時期と対象

2022年9月～10月に本学保育内容 A の受講生を対象に、グループワークにて『音によるあそび』をテーマに保育活動を考案することを課題とし、発表後に Google form にて振り返りを行った。受講生は40名であった。

2. 授業の展開

グループワーク I 「音によるあそび」の授業の展開は表1の通りである。

表1 保育内容 A 「音によるあそび」授業の流れ

授業回数	月日	概要
1	9月13日	授業趣旨説明「見えないもの」を子どもに伝えよう！ グループ発表（5名×8グループ）グループ内の役割分担決定 サウンド・ワークの実施
2	9月20日	『音』によるあそび①保育計画作成 (meetによるオンライン授業・ルームを作りグループワークを実施)
3	10月4日	『音』によるあそび②計画の実践、パワーポイント作成
4	10月11日	『音』によるあそび③1～6グループ発表
5	10月18日	『音』によるあそび④7, 8グループ発表、振り返りフォーム記入

『音』によるあそび』に関する授業は、15回のうち第1回～第5回であった。第1回目

はオリエンテーションとして授業全体の趣旨説明と、グループワーク I に向けて幼稚園教

育要領の領域「表現」の内容「(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」等について確認を行った。『音』をテーマにすることで学生が既存の音楽や楽器を用いた活動に傾くことが想定されたことから、自然や身近にある音そのものに子どもが気付くことができたり、多様な音色を楽しんだり、音を自由に他のもので表現したり、友達と伝え合ったりできるようなあそびを考えるよう示唆した。また、マリー・シェーファー著「音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション」からいくつかのサウンド・ワークを行った(注2)。あそびの対象年齢は4歳児とし、あそびのねらいも各グループで設定することとした。

第2回及び第3回目は、グループ活動で遊びを考案し実際に行い、第4回目の発表に向けてパワーポイントをまとめる時間とした。初めてのパワーポイントの扱いに手間取り、発表が第4回目の1時間で終了しなかったため、第4回目に発表できなかった二つのグループは5回目に行い、全てのグループの発表が終了した後に振り返りフォームの記入を行った。事前に発表スライドは提出することとし、全グループのスライドを資料として配布した。印刷は教員が行った。

3. 振り返りフォームの分析

振り返りにより得られた結果について分析を行った。振り返りフォームの項目は以下に示す。

①②の回答について、学生が主体的に活動に参加し取り組むことができたか、自己評価について分析・考察を行った。③～⑥の自グループの活動及び他グループの発表の評価から、学生がどのような点に着目し何を良いと考えているのかを検証した。そして⑦の自由

記述から学生の学びについて分析し、考察を行った。

- ①グループワークにおけるあなた自身の取り組みを自己評価しましょう。
- ② ①のように評価した理由を書きましょう。
- ③あなたのグループの活動及び発表について5段階で評価しましょう。
- ④ ③のように考える理由を書きましょう。
- ⑤自分のグループ以外で良かったと思うのは何グループですか？
- ⑥ ⑤のように考える理由を書きましょう。
- ⑦グループワーク I の活動・発表を通して学んだことを書きましょう。

Ⅲ. 結果および考察

1. 自身の取り組みについての自己評価

①のグループワークにおける自身の取り組みの自己評価について、1～5の5件法(1=全く良くなかった、5=とても良い取り組みができた)による自己評価をまとめた(図1)。

その結果、1は0名、2が2名、3が9名、4が21名、最高点の5が8名であった。

高い評価である4または5をつけた学生の、②の評価理由の記述には、「パワーポイントを作成し、自ら動画を作成したり提案したりしたから」、「メンバーの写真や活動中の動画撮影をしっかりと行うことができました」、「グループリーダーとして話し合いの場面では司会を行い、活動内容をまとめていきました。全員が意見を出せるように「○○ちゃんはどう思う?」と話しかけ、グループ全体で充実した話し合いができるよう工夫しました」等の回答例があり、グループの中での自己の役割をしっかりと理解し主体的に取り組んだというもの、また「みんなで協力しながら、文章や実験を考え、パワーポイントを作成しました」「友達どうして意見を出し合いながら音

の活動ができたため」「自分の意見を伝えながらも、グループの仲間の意見も聞き、活動内容をより深めながら進めることができたと思うから。」とメンバー間で意見を出し合い協力しながら活動できたことを理由とするものが示された。

一方で低い評価である2をつけた学生の評価理由を見ると、「実習のため途中で参加したため、あまり自分から活動に参加することができなかった」等があり、3をつけたものの中には、「活動内容についての提案はできたが、実際に実験をする日に（就職）試験で休んでしまったため」という記述が見られた。不可避の理由による欠席のため活動に積極的に参加できなかったことによりやや低めの評価にしたと考えられるが、これはグループワークⅠの実施時期がコロナ感染症の影響により実習の時期と重なってしまった学生が複数存在したことによるものである。

また、3の評価の理由からは、「もっと深く調べたり、スライドに表示できると思った」等、他グループの発表を見たことによって自身の取り組みについてももっとよりよくすることができた、との思いによるものであったことが示された。

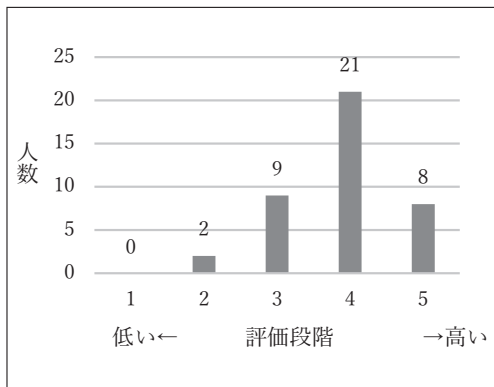


図1 自身の取り組みについての自己評価

2. 自グループに対する評価

③の自グループの活動及び発表について、5件法（1 = 全く良くなかった、5 = とても良い取り組みができた）による評価の結果を示した（図2）。自グループの活動及び発表については、全員が3以上の評価をつけた。

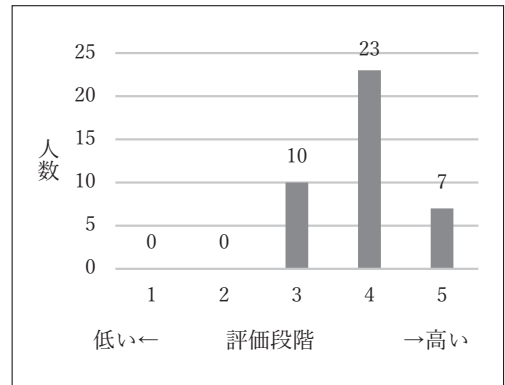


図2 自グループに対する評価

④の評価理由の自由記述から、高い評価である4および5の理由を見てみると「グループ全員で協力して活動することができたから。どんな内容にするか、誰が何を担当するのか、実際に子どもと活動する際の注意点や配慮は何か、活動をより楽しくするために何か工夫できることはないか等こまめに話し合いを行い、進めることができたと思う。」「グループのみんなで試行錯誤しながら工夫をして音について学ぶことが出来たから」等の例があった。また、3をつけた理由としては、「内容としては様々な発見をすることが出来たが、スライドに動画などの添付がなく、もっと分かりやすいスライドを作ることが出来たと思うからです。」等が示された。あそびの内容そのものの評価と、グループワークへの各々の貢献度やグループ内で協働できたか、スライドの構成や発表の仕方などに対して評価していることが読み取れた。スライドの作

り方については反省材料として上がっているが、他グループの報告発表との比較から感じたことと考えられ、互いに発表したことでより良いものを作りたいという意識の向上につながったものと推察される。

3. 自グループの評価と他グループからみた評価から

1) 対象年齢を考慮する大切さ

次に、個人ではなく各グループの自グルー

プに対する評価と、他グループから見た評価の相関を検証するため、自グループの評価の評価段階の1を1点、2を2点として点数化し、グループごとの点数を集計した。また⑤の良かったと思うグループへの投票を一人2点として集計し、他グループからの評価の得点とした。その二つの相関を図3に示す。

自グループの評価については、グループごとの評価を並べてみると大きな凹凸は見られなかったが、最も評価が高いのは7グループ、

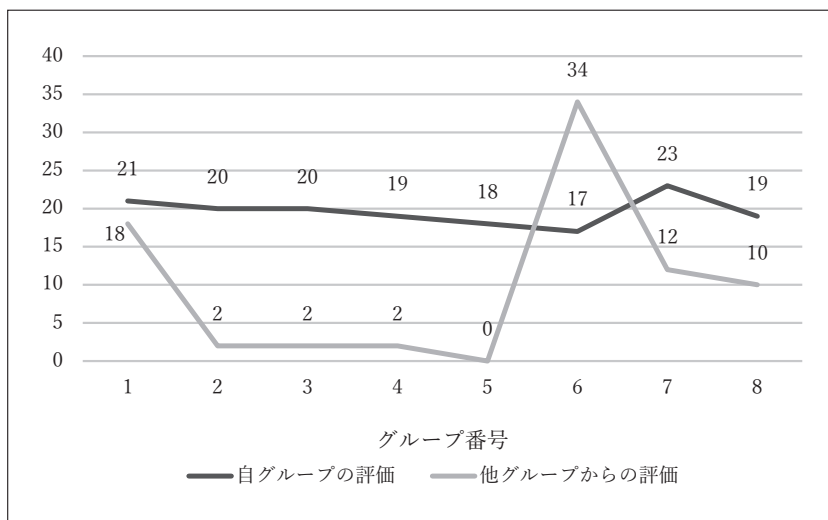


図3 自グループの評価と他グループからの評価

低いのは6グループであった。他グループからの評価を見ると、6グループが最も多く34点と突出している。次いで1グループが18点、7グループが12点、8グループが10点であった。この二つの相関を見ると、自グループの評価が低かった6グループは、他グループからの評価が最も高かったことが分かる。

6グループの活動は、ねらいを「声の大きさや高さによる動きの変化を楽しむ。どんな模様ができるか想像力を養う。」として、ボールに黒いビニールを張って膜を作り、その

上に塩を撒いてその上からさまざまに声を出し、できた模様を観察して楽しむというものであった。

6グループに投票した理由を自由記述から見ると、「塩を使い音がどのように伝わっているのか目に見えて分かったので分かりやすかった。」「塩で模様ができたり跳ねるところが見えるため視覚的にも楽しめる所が良いと思った。たくさん声を出すため、子どもも楽しめると思った。」などがあった。

一方、6グループの自グループ評価は高く

はなく、その理由を見てみると、「4歳児の活動としては少し難しかったのではないかと思います。」「活動は大人だと楽しく行うことができましたが4歳児にしては少し難しい遊びになってしまった」などがあった。学生が目線で楽しい、面白いと思う活動でも、保育の中で対象年齢にふさわしいものかどうかを考慮する必要があるということを、報告・発表してみることで、実際にその活動を行った学生たち自身が感じたということが言えるであろう。

2) 五感を使って楽しむ活動

1グループは、自グループの評価も他グループからの評価も高い結果であった。1グループの活動は、ねらいを「身近なものを使ってあそぶことを楽しむ。砂を使って音の違いを楽しむ」として、簡易的な砂場を準備し、容器から移し変えたり水を加えたりして音の変化を楽しむという活動を丁寧に説明したものであった。自グループの評価では「砂はとても身近にあり、子どもの遊びに取り入れやすいと思った。いろいろな音を出せるよう水の量、砂の量、使うものも工夫できていたので良かった」「同じグループのみんなと協力して活動、発表準備、発表を行うことができましたからです。また、活動では音だけでなく感触にも視点を置いて取り組むことができたからです。」「意見も多く出て、それぞれが発表や動画について工夫を考えていたのでより具体的で発展できそうな内容になったのではないかと思います。」というものが示されており、あそびの内容自体の評価と、各自が積極的に取り組み協働することができたと感じていることが分かった。他グループからの評価では、「音によるあそびのテーマから、砂というものに着眼することに驚きました。感覚遊びの方に使われることが多いと思うの

で、水の量や砂の触り方によって音が違うことの面白さを感じることができるのがとても面白いと思いました。音によるあそび、感覚遊びを並行して行えることは子どもにとっても様々な刺激があり、良いと思いました」「砂や土といった自然のものに目を向けていることが面白いと思った」と、五感のうち聴覚・視覚以外にも触覚を使う活動であったことと、その着眼点の面白さが学生の評価の高さにつながっていることが分かった。

3) 現場での取り入れやすさ

自グループの評価が最も高かったのは7グループであり、他グループからの評価でも6点獲得した。自グループの評価の理由としては「グループの中でも誰がどのような音を作り出し、遊びを考えるかを役割分担しながら活動することが出来たからです」「身近にあるもの」を主として考えて、ペットボトルは基本的に誰でも用意することが可能なことから、子どもたちと一緒に遊ぶには良い材料ではないかと思ったからです。様々な音の出し方があり、子どもが自ら遊び方を開発しやすいことも、音による遊びの分野ではとてもよかった点だと思います」とグループメンバーが各自の役割をしっかりと果たし、積極的に活動したことと、身近で準備しやすい素材を用いたことが評価の高い理由であった。

他グループからの投票の理由として、「ペットボトルに水を入れたり切ったストローを入れた遊びというのが、実際に幼稚園等で行うことを考えた際に手に入りやすい材料なので取り組みやすい」「(ペットボトルを用いた)アンサンブルは子どもでも楽しく簡単にでき、保育の現場でも役立てることができると思いました」というものがあり、保育現場における取り組みやすさ、自分達でも取り込みやすいと考えたことが、学生の評価に反映さ

れていたと考えられる。

4. 学んだことの自由記述から

発表終了後、グループワークⅠの活動全体を通して学んだことについての自由記述を求

めた。

表2に自由記述の例を示した。学んだこととして最も多かったのは、「多様な音や遊び方の気づき」であった。ここから、多様な音の出し方やそれらによるあそびの面白さに気

表2 「グループワークⅠの活動全体を通して学んだこと」の自由記述例

「多様な音や遊び方の気づき」(19)

- ・音ひとつ取り上げても、活動・遊びには様々な種類があり、同じような活動だとしても感じ方や考え方、子どもと遊ぶ時の工夫の仕方などがそれぞれ異なったことが面白いと感じた。
- ・身近な素材だけでも様々な音を出すことができるんだと感じた。今回使った素材以外でもどのような音が出るのか気になったので色々な素材を使ってまた音を出してみたいと思った。
- ・「音」という一つのテーマでも、こんなにも種類を展開できるのかと驚きました。どこにいても基本何かの音が聞こえていて、沢山の種類がある中でひとつに絞って音の遊びを考えることは、少し苦戦しましたが、私たちはペットボトルをテーマに活動を広げることが出来、楽しかったです。保育の現場でも、発達によって臨機応変に遊び方を変えて、経験を活かすことが出来ると思うので、実際にやってみたいです。

「自グループ内での話し合い・活動からの学び」(5)

- ・グループのみんなと話し合うことで自分だけでは思いつかなかったアイデアがでてきて楽しく進めることができました。
- ・グループで進めていく中で新しい発見があり、楽しめたため子どもと同じように活動しても楽しめるということを学んだ。
- ・音というものから様々な遊びを考えたり発展させたり、他の人と疑問を共有することでよりいい学びができたと思います。

「他グループの発表からの学び」(11)

- ・自分たちが活動内容の相談をした時には出てこなかった「音」が他のグループの発表では沢山出てきて、なるほどと思うことが多かった。話を聞いていて、音遊びは日常の中にあって、自然に生まれていくものなのだったと思った。他のグループの合奏がとても楽しそうだったので自分でもやってみようと思った。
- ・他のグループの発表を見ると声の大きさを使ったり、ペットボトルを使って音を出すなど音によるあそびは沢山あり、保育室にあるものでもたくさんの音があることが分かりました。一つのものでも何個かの音を出すことができることも学びました。
- ・それぞれのグループの考え方が違って発想の豊かさを学びました

「保育者としてのあり方について」(12)

- ・保育者は子どもの年齢や発達を考え、それに合った遊びや環境の準備をすることが必要であると学んだ
- ・自分たちが普段しないことをしてみることで、新しい発見に繋がったり、実際に行うことで子どもたちにとって難しいものであるか、子どもでも出来るのかを把握することができたため、まずは自分たちがやってみるものの必要性を学んだ。この活動で子どもたちに何を感じてほしいのかを考え、それに沿って活動を行うことの大切さも改めて学んだ
- ・保育者としてきっかけを提示して、そこから子どもたちが自らあそぶことができるようにしていきたいと思った

「年齢に合わせた活動を考える難しさ」(2)

- ・大人の立場で遊びを考えることは簡単だけれど子どもが行う想定で考えることは難しいと感じたので次回はグループの皆と今以上に話し合う必要があると感じました。
 - ・学んだことは、年齢に合わせた活動を考える難しさです。ただ、楽しい活動を考えるだけでなく、年齢や発達に合わせた活動を考え、子どものどんなところが育ってほしいのか、ねらいを定めた上で活動を考えることが大切だと思いました。
-

付き、さらにもっとやってみたい、保育の現場でも生かしたいという意欲が高まったことが読み取れた。また、「自グループの活動からの学び」及び「他グループの発表からの学び」についての記述から、グループ活動における話し合いの中で新しい発見があり、他グループの発表を見ることによってさらに多くのアイデアに触れることができ、発想を豊かにすることにつながったと考えられる。

そして、「保育者としてのあり方について」では、子どもの年齢や発達を踏まえて、子どもに何を感じてほしいのかというねらいを定めて活動を考案し環境を準備することの大切さ、そしてまずは自分たちがやってみることの必要性も感じていることがわかった。また、「年齢に合わせた活動を考えることの難しさ」についても記述がみられた。

Ⅳ. 総合考察

振り返りフォームの分析から、グループワークに対する自身の取り組みについては、自身の役割をしっかりと果たし主体的に取り組み、メンバーと対話を重ね協働することで活動を深めることができたとする意見が見られた。自己評価を2とした学生も、③の自グループの活動・発表に対する評価を見るとどちらも4であり、自己のグループへの貢献度が不可抗力により低かったと感じた場合でも、グループワークからの学びは大きかったものと考えられる。

自グループの活動・発表に対する評価は概ね高かった。あそびの内容、グループワークの取り組み方、発表の工夫について評価しており、他グループの発表との比較から、自グループの反省点が抽出できた例も見られた。

他グループからの評価が最も高かった6グループの、自グループの評価理由から、4歳児という年齢には少し難しい活動であったと

感じたことが分かる。活動を考えていた時点ではなく発表し共有した後にそのように感じたということは、他グループの発表を見ることによって自分たちの考案した遊びを客観的に捉えることができ、その上で対象年齢にはあまりふさわしくなかったと感じたものと推察される。しかし、音の振動を自分の声と身近なものを用いて視覚的に捉えてみるという活動のアイデア自体は、幼稚園教育要領に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(6) 思考力の芽生え」にもつながるものである。他グループからの評価が高かったのも、8グループで唯一、声を使っていたことと、視覚的にも楽しむことができるといふそのアイデアの面白さからであった。学生たちが保育者となった時に、対象年齢を考慮した上で、子どもたちが楽しんで取り組めるように取り入れていてもらいたい内容であると考えられる。

自グループの評価と他グループからの評価のどちらも高かったのは1グループであった。理由は、砂という自然のものに着目したことと、触り方によっても出る音が異なるなど、聴覚・視覚以外に触覚も使って楽しめる活動であったから、というものであった。松村が「音を意識して聴くといった音楽表現の保育指導法は、それにとどまらず5領域の一体的な育成に関わっている」と述べているように、五感を使い、感じたことを言語化するなどして共有することで、子どもの様々な力を育むことができると考えられる。

自グループの評価が最も高かった7グループでは、ペットボトルやストロー等の身近な材料から多様な遊びができる点が保育の現場で役立つというもので、保育現場での活用のしやすさを見据えての評価の高さであった。

活動・発表を通しての学びについての自由記述からは、自グループの話し合いの中で、

音の多様さや面白さに気付き様々な遊びを知ることができ、また他グループとの活動内容の共有からさらに、自分ももっとやってみたい、保育の現場で生かしていきたいとの意欲の高まりがみられた。他グループからの学びに関して、「話を聞いていて、音遊びは日常の中であって、自然に生まれていくものなのだった」という記述があった。自然のものや身近な材料から音は生まれ、日常の中からそれに気づくことが、豊かな感性の育ちにもつながる。それに気付いたことは保育者として大きな学びであると考えられる。また、学びについての自由記述では「保育者としてのあり方について」に関するものも多く見られた。子どもの年齢や発達を踏まえた上で、何を子どもに感じてほしいのかを明確にしてねらいを設定し、環境を整え構築し、準備することの必要性を、改めて実感していた。活動を行う際に子どもに伝える注意点をまとめるなど、実際に現場で行うことを想定して遊びを考案することができていたグループもあった。年齢に合わせた活動を考えることについては「実際に行うことで子どもたちにとって難しいものであるか、子どもでも出来るのかを把握することができたため、まずは自分たちがやってみるものの必要性を学んだ」という記述があったが、一方で6グループのように発表した上でその難しさを感じたというものがあり、その難しさに気付けたことは、協同学習の成果の一つと考えられる。

以上の考察から、日常の中で自然や身の回りにある多様な音への気づきを高め、それらを様々な方法で楽しむ活動を考案するという活動は、一定の成果を得られたと考える。学生の評価は、主に遊びのアイディアの面白さ、年齢・発達を考慮しているか、五感を使った活動、身近で保育現場でも用いやすい、といった観点からなされ、保育活動を計画する際に

子どもに何を感じてほしいかを明確にすることについての学びも記述されており、協同学習による学びは専門職である保育者としての資質を高める上で有効であった。今後の授業改善のためには、今回は全てのグループで対象年齢を4歳としたが、グループによって対象年齢を変えてみることで、発達段階に沿った取り組みが考案され、より多様な試みが期待できる可能性が考えられる。

【注】

- (1) 学生によっては後期開講後に延期となった場合もあった。
- (2) ワーク①一枚の紙を全く音を立てないようにしてグループで回す。戻ってきたら、その間に聴こえた音を書き出してみる。グループで一番多く音を聴いたのは誰？ワーク②一枚の紙からどんな音が出せるか、できるだけたくさん考えてみる。グループごとに発表する。③手にシャベルを持って、いろんなものを掘ってみると想定し、その音を声で表現してみる。④「ある場所のコンサート」を演奏する。ある場所にいると想定し、そこで聴こえる音を思い浮かべ、グループで声だけでその音を真似てみる。コンサートを聴く者はどこから聴こえる音かを当てる。
- (3) 第2回目は台風14号の影響によりオンライン授業となったため、オンライン会議システム（Google Meet）により各グループで打ち合わせを行った。

【引用・参考文献】

- 石森真由子・上村裕樹・岩淵摂子（2022）保育内容 A - 遊びの工夫と展開 - 保育指導法実践研究報告書 vol.7, 聖和学園短期大学保育学科, 7-22.
- 松村万里子・佐藤万利子・岩淵摂子・飯島典子（2022）保育者を目指す学生の「音を聴くこと」の意識を高める授業の実践. 聖和学園短期大学紀要, 59, 1-10.
- 無藤隆監修・吉永早苗著（2016）子どもの音感受の世界 - 心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求 - 萌文書林.
- R. マリー・シェーファー・今田匡彦（2013）音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション. 春秋社.

文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領. チャイルド社, 3-22.

Johnson, D.W. and Johnson, R.T., Holubec, E.j. (1993) Circles of Learning : Cooperation in the classroom. Interaction Book Company (杉江修治ら訳 1998 学習の輪 アメリカ協同学習入門, 二瓶社)